

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 8 月 28 日現在

機関番号：14602

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370407

研究課題名(和文) 銭謙益の『列朝詩集小伝』に関する実証的研究

研究課題名(英文) Research regarding Qian Qianyi's Liechao shiji Xiaozhuan

研究代表者

野村 鮎子(NOMURA, AYUKO)

奈良女子大学・人文科学系・教授

研究者番号：60288660

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)： 銭謙益『列朝詩集小伝』は、明代の詩人を研究するための基本的な伝記資料であり、後世の明文学史観に大きな影響を与えた。しかし、銭謙益が書いた詩人の伝記には多くの解決すべき問題点がある。『列朝詩集小伝』には、典拠未詳の逸話や意図的な改変が含まれているのである。本研究は、主に銭謙益による『列朝詩集小伝』の詩人の伝記および文学批評に関するいくつかの問題をとりあげて分析したものである。この研究成果は『『列朝詩集小傳』研究』として2018年1月に公開する。

研究成果の概要(英文)： Qian Qianyi's Liechao shiji Xiaozhuan is the standard biographical account of the Ming Dynasty poets, and Qian's literary criticism, interspersed in the biographies, strongly influenced the later view of Ming Dynasty literary history. However, the Liechao shiji Xiaozhuan presents a number of problems, such as anecdotes without clearly identified sources and textual alterations that appear to be intentional. This research analyzes some of the problems raised by Qian Qianyi's biographical and literary-critical writing in the Liechao shiji Xiaozhuan. The findings will be published as The Studies of Liechao shiji Xiaozhuan (Kyuko Syoin, January 2019).

研究分野：中国文学

キーワード：列朝詩集小伝 銭謙益 明詩 明末清初

1. 研究開始当初の背景

(1) 銭謙益『列朝詩集小伝』の後世への影響とその問題点

『列朝詩集』は、銭謙益(1582-1664)が明朝滅亡後に編纂した明詩のアンソロジーである。上は皇帝から下は宦官にいたるまで1800余名の詩篇を詩人別に集めており、詩の冒頭には各詩人の略伝である「小伝」を置く。康熙37年(1698)には、銭謙益の族孫である銭陸燦が「小伝」のみを抽出して『列朝詩集小伝』(以下、『小伝』)を刻行した。

『小伝』は明代詩人の伝記のみならず、銭謙益の詩人に対する批評や評価を含んでいる。明の文壇を席卷したのは古文辞派(擬古派)であったが、銭謙益は『小伝』の随所で、古文辞派を「模擬剽窃の学」として批判する一方で、古文辞派と異なる文学観を有し、古文辞派隆盛の陰で埋没していた文学者を再評価した。こうした彼の反古文辞の文学観は、『明史』文苑伝にも受け継がれ、今日の明文学史の基調となっている。

しかし、問題は、銭謙益が詩人の逸話を原資料から採取する際に、伝記の一部を己の反古文辞の主張を裏付けるように改変したことにある。

『明史』の文苑伝には『小伝』を抄略したとおぼしき表現が随所に見られる。これまでの明詩研究は、詩人の伝記やその評価を論じるとき、『小伝』やこれを踏襲した『明史』文苑伝をそのまま引用する傾向にあった。そのため、誤謬に満ちた『小伝』は今日でも明代詩人研究の基本文献として検証されることなく、引用踏襲され続けている。

(2) 日中における銭謙益評価と『列朝詩集小伝』研究の立ち遅れ

銭謙益は明末清初の文壇の大立者であるが、彼についての研究はあまり多くはない。日本では、吉川幸次郎「銭謙益と清朝経学」(1970『吉川幸次郎全集』巻16所収)と「文学批評家としての銭謙益」(1980『同』巻26所収)があるぐらいである。特に、中華圏では銭謙益には明朝と清朝の二朝に仕えた「弑臣」としてマイナスイメージがあり、20世紀には「銭謙益=売国奴」研究への忌避感があったことは否めない事実である。

21世紀に入って台湾中央研究院『中國文哲研究通訊』14巻2期(2004)が銭謙益研究の特集号を組んだが、そこに収載された「研究要目」(論文リスト)はさほど長大なものではなく、かつ『小伝』についての专著はない。

丁功誼『銭謙益文学思想研究』(上海古籍出版社2006)や周建渝『列朝詩集小伝』的明詩評及其用意」(『復旦学報』2008-6)、蒋寅「銭謙益の詩学理論及其批評実践」(『中国社会科学院文学研究所集刊』第1輯2007)が発表されたが、いずれも『小伝』を題材として銭謙益の文学観を論じたものであって、

個々の詩人について伝記の出典や依拠資料を調査し、『小伝』の誤謬を正したものではない。

2. 研究の目的

(1) 『小伝』が依拠した原資料の調査索出と誤謬の弁駁

『小伝』が依拠した資料は、詩人の墓誌銘や行状、詩集の序文から詩話や筆記、あるいは小説や野史の類にまで及んでいる。しかし、依拠した資料名や逸話の出処は記されていない。

そのため、まずは『小伝』が依拠した原資料を調査索出し、『小伝』の内容と比較検討して、改変や潤色の有無を考察する必要がある。その次に『小伝』と原資料の内容を比較検討し、その改変や潤色の意図を探りながら、『小伝』の誤謬を弁駁する。

(2) 明代詩人研究に関する基本文献の整備

近年は公的図書館が蔵する資料の電子画像公開や電子書籍の発売によって、これまで閲覧が難しかった明代の文献へのアクセスが可能になりつつある。しかし、一方で、日本における明詩研究の基本図書は未整備の状態にあることから、明詩について関心をもつ研究者は一向に増加しない状況が続いている。

六朝詩研究ではすでに興膳宏編『六朝詩人傳』(大修館書店2000)、唐詩には、小川環樹編『唐代の詩人—その傳記』(大修館書店1970)、近藤光男『四庫提要総目提要 唐詩集の研究』(研文出版1984)、宋詩には算文生・野村鮎子『四庫提要北宋五十家研究』(汲古書院2000)、『四庫提要南宋五十家研究』(汲古書院2006)、『四庫提要總集研究』(汲古書院2013)といった基本図書がある。本研究は、明代詩人研究に関する基本文献を整備するという目的も併せ持つ。

3. 研究の方法

(1) 『列朝詩集小伝』講読会の定期開催

本研究では、研究グループ(研究代表者・研究分担者・連携研究者・研究協力者)を組織し、3~4週間に1度の頻度で『列朝詩集小伝』講読会を開催した。

グループ内であらかじめ担当する明代詩人を決めておき、担当者は詩人の「小伝」の訓読や注の外に、「小伝」が依拠したと思われる原資料を索出し、「小伝」に改変または潤色が疑われる箇所がないか、ある場合はどのような改変なのかについて調査し、レジュメ報告する。研究会では、それをもとに改変の意図やその効果について検討した。

(2) 国内外の研究機関への調査

国内では、内閣文庫や京都大学人文科学研究所漢字情報センター、国会図書館、海外で

は、台湾の国家図書館、北京の中国国家図書館、北京大学図書館に赴き、調査を行った。

4. 研究成果

(1) 『列朝詩集』の体例について

『列朝詩集』は元好問の『中州集』に倣って集を分かつのに十干を用いたが、実際には皇帝の部の「乾集上・下」と僧侶や香奩、神鬼、外国人などの「閏集」を除いた外は、「甲集前編」・「甲集」・「乙集」・「丙集」・「丁集」があるのみで、「戊集」以下は存在しない。しかも集ごとの詩篇の分量に著しい不均衡があり、特に嘉靖以後の124年間の詩人はみな丁集に押し込められた格好になっている。

『列朝詩集序』やその他の関連文献を検討した結果、戊集以下は明復興の盛徳大業を成し遂げた後に編纂されるべきものという錢謙益の意図が隠されていたことが判明した。

また、『列朝詩集』は明詩の選集であるが、「甲集」の直前に「甲集前編」が設けられ、ここに元末の遺老や元明両朝に出仕した詩人を著録することの意味についても検討し、明末清初に殉国した詩人や明の遺民については詩を採録しない代わりに、「甲集前編」を設けることで明朝遺民の境地を投影させようとした錢謙益の意図も明らかにした。

(2) 『列朝詩集小伝』の意図的な伝記改変について

『小伝』の講読を続ける過程で、以下のような『小伝』の文学批評と詩人伝記の意図的な改変が明らかになった。

文統・詩統の堅守

『小伝』の最大の特徴は埋没した詩人を発掘し、文学史の流れの中で再評価したことにある。錢謙益が正統であると考えた文統・詩統である。この態度は「歸有光伝」などに顕著である。「歸有光伝」が引用する逸話の原典を確認したところ、歸有光が古文辞派の王世貞と対等に口論したかのようにエピソードを捏造した箇所があることが確認された。

古文辞派や竟陵派への批判

錢謙益は、時には伝記の歪曲をも辞さない強硬さで古文辞派の領袖を批判しており、それは特に後七子である「李攀龍伝」や「王世貞伝」にとりわけ顕著である。ただし、より激烈な批判の辞は竟陵派に向けられている。批判の中心となるのは「鍾惺伝」とその「附見」である「譚元春伝」、さらに譚元春詩の後に附加された論評である。特に「譚元春伝」と「論譚元春詩」には同時代人の竟陵派批判の語が複数引用されているほか、錢謙益が反論を目的として竟陵支持者の言を引用した箇所もある。調査の結果、その中には錢謙益が原資料の文章を恣意的に改変したものが判明した。

呉の復権への希求

錢謙益の呉人としての意識が鮮明に出ているのは、唐寅・祝允明・文徵明とともに呉中の四才子と称されながら、進士及第後、北地の李夢陽の古文辞に傾倒した徐禎卿の小伝である。錢謙益は「徐禎卿伝」で、徐禎卿が古文辞に傾倒したことで、呉の名士から誹られたというが、この話の典拠は未詳であり、この部分は錢謙益による創作の可能性が高い。

呉の詩が北地に呑み込まれたことが古文辞派の猖獗を招いたと考える錢謙益は、呉地が竟陵派＝楚風に毒されつつある現状を徹底的に批判する。攻撃の矛先は呉の出身でありながら楚風になびいた、葛一龍のような詩人にも向けられている。『列朝詩集』では晩年の葛一龍の竟陵風の詩篇はすべて削除されていることが確認された。

(3) 『列朝詩集小傳』研究』の刊行

上述したように、『小伝』は明詩研究の基本文献として後世の明文学史観に大きな影響を与えたが、錢謙益による詩人の伝記に対する意図的な改変や詩人评价の偏向など多くの問題がある。

本書は『小伝』の中から明代の代表的な詩人約40名を選び、こうした誤謬を考証糾正した研究書である。とりあげた『小伝』は下記のとおりである。

- 一 錢謙益「歷朝詩集序」
- 二 太祖高皇帝 朱元璋（乾集卷上）
- 三 劉 基（甲集前編卷一・甲集卷一）
- 四 楊維禎（甲集前編卷七之上・卷七之下）
- 五 高 啓（甲集卷四）
- 六 宋 濂（甲集卷十二）
- 七 楊士奇（乙集卷一）
- 八 高 棅（乙集卷三）
- 九 李東陽（丙集卷一）
- 附 王元美「書西涯古樂府後」
- 一〇 王守仁（丙集卷四）
- 一一 沈 周（丙集卷八）
- 一二 祝允明（丙集卷九）
- 一三 徐禎卿（丙集卷九）
- 一四 唐 寅（丙集卷九）
- 一五 文徵明（丙集卷十）
- 一六 李夢陽（丙集卷十一）
- 一七 康 海（丙集卷十一）
- 一八 邊 貢（丙集卷十一）
- 一九 何景明（丙集卷十二）
- 二〇 楊 慎（丙集卷十五）
- 二一 王慎中（丁集卷一）
- 二二 唐順之（丁集卷一）
- 二三 羅洪先（丁集卷一）
- 二四 茅 坤（丁集卷三）
- 二五 李攀龍（丁集卷五）
- 二六 謝 榛（丁集卷五）
- 二七 王世貞（丁集卷六）
- 二八 歸有光（丁集卷十二）
- 二九 徐 渭（丁集卷十二）
- 三〇 湯顯祖（丁集卷十二）

- 三一 袁宗道(丁集卷十二)
- 三二 袁宏道(丁集卷十二)
- 三三 袁中道(丁集卷十二)
- 三四 鍾惺(丁集卷十二)
- 三五 譚元春(丁集卷十二)
- 附 錢謙益「論譚元春詩」
- 三六 程嘉燧(丁集卷十三之上)
- 三七 唐時升(丁集卷十三之上)
- 三八 婁堅(丁集卷十三之上)
- 三九 謝肇淛(丁集卷十六)
- 四〇 李贄(閩集卷三)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

野村鮎子、田口一郎、和泉ひとみ、松村昂、
「詩人の傳記と批評はどのように形づくられるか—『列朝詩集小傳』を例に—」、『日本中国学会 2017 年度研究集録』
(<http://nippon-chugoku-gakkai.org/index.cgi>)、査読有、2017)

野村鮎子、「晩明における南宋遺民詩の受容—錢謙益の評価と毛晋の刻書を中心に—」、『橄欖』20号、2016、pp.317 - 336

和泉ひとみ、「沈周における蘇軾の受容—錢謙益の批評を中心に—」、『中国文学会紀要』第37号、2016、pp117 - 132

野村鮎子、「『列朝詩集小伝』にみる竟陵派批判の構造—引用資料を中心に—」、『叙説』42号、査読無、2015年、pp.1-28

〔学会発表〕(計5件)

野村鮎子、「錢謙益『列朝詩集』の編纂過程と體例の謎」、第63回國際東方学会議シンポジウム「明末清初研究の新動向—思想・文学・芸術」、2018.5.19、於日本教育会館

野村鮎子、「『小伝』の依拠資料からみた『列朝詩集』の性格」、日本中国学会第68回大会パネルディスカッション「詩人の伝記と批評はどのように形づくられるか—『列朝詩集小伝』を例に—」、2016.10.8、於奈良女子大学

田口一郎、「謝榛小伝からみる『列朝詩集』の性格」、日本中国学会第68回大会パネルディスカッション「詩人の伝記と批評はどのように形づくられるか—『列朝詩集小伝』を例に—」、2016.10.8、於奈良女子大学

和泉ひとみ、「『列朝詩集小傳』李東陽、湯顯祖の評価をめぐって」、日本中国学会第68回大会パネルディスカッション「詩人の伝記と批評はどのように形づくられるか—『列朝詩集小伝』を例に—」、2016.10.8、於奈良女子大学

松村昂、「『小伝』における李卓吾の位置づけについて」、日本中国学会第68回大会パネルディスカッション「詩人の伝記と批評はどのように形づくられるか—『列朝詩集小伝』を例に—」、2016.10.8、於奈良女子大学

〔図書〕(計1件)

野村鮎子 他、汲古書院、『『列朝詩集小傳』研究』、2019、816頁(予定)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

野村 鮎子 (NOMURA, Ayuko)
奈良女子大学・人文科学系・教授
研究者番号：60288660

(2) 研究分担者

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
田口 一郎 (TAGUCHI, Ichiro)
研究者番号：70303097

(3) 連携研究者

松村 昂 (MATSUMURA Takashi)
京都府立大学・文学部・名誉教授
研究者番号：10030420

(4) 研究協力者

和泉 ひとみ (IZUMI, Hitomi)